エラスムス『格言集』序文に関する一考察

――ルネサンス道徳思想の一表現――

柳　沼　正　広

はじめに

ルネサンスのヒューマニストたちは、詩人の大切な役割の一つは道徳的な教えをもたらすことであると考え、また演説を行う者や散文をものする者も道徳を説く役割を担うと信じていた。そして自分たちが文章を作る際には、そのような教えを表現する含蓄のある言葉や格言で、その文章を引き立たせようとした。それらの言葉や格言あるいはことわざといったものは、詩人たちから引用されたり、あるいは自分たちで考えられたりもしたが、これを容易にするためにヒューマニストたちは備忘録に、歴史上の様々な逸話や引用句を書きとどめていた[1)]。また、すぐれたラテン語の文体による表現力、つまり雄弁こそヒューマニストの追求したものだった。そのような中で大きな人気を博したのがエラスムス（1466-1536）の『格言集』であった。その中には膨大な古代の文献から集められたことわざ・格言が収められており、『格言集』は幾世紀にもわたって出版され続け利用された。

本稿では、1500年７月に発刊された『格言集』初版に序文として寄せられた書簡を読み解くことを中心に、その前後のエラスムスの足取りとそのほかの関連文献を参照しながら、エラスムスの『格言集』の性格の一側面を明らかにし

１）Kristeller, Paul Oskar, ‘Humanism and Moral Philosophy,’ in *Renaissance Humanism: Foundations, Forms and Legacy* vol. 3, ed., Rabil Jr., Albert, (Univ. of Pennsylvania Press, 1988) pp.271-72.

たいと思う。それは、格言やことわざの多くが古代ギリシア・ローマの文献から集められていること、つまりキリスト教信仰から見れば異教の起源をもつことによる問題である。ルネサンスの道徳思想においては、人間の最善の生き方を問うことと並んで、キリスト教と古代の道徳的な教えとの間に確かな関係を築く試みが最も重要な問題であった[2)]。

1．1496年ヘンドリック・ファン・ベルヘン宛て書簡

1492年4月25日、エラスムスはユトレヒトの司教によって司祭に叙任された。そして間をあけずにカンブレイの司教ヘンドリック・ファン・ベルヘンに仕えるためステインの修道院を離れている。ヘンドリックは枢機卿となることを目指してローマ行きを計画していたようで、そのための秘書を必要としていたとみられる。おそらくエラスムスのラテン語の力が認められたのだろう。ヘンドリックに仕えている間に、ベルヘンオプゾームではヤコブ・バットと出会い、ハレステレンでは1495年春ごろ異教の文学を擁護する『反蛮族論』の大幅な書きかえを行っている。ヘンドリックのローマ行きの話がなくなったとき、エラスムスは、バットの勧めに従ってパリで学ぶ許可をヘンドリックに願い出た。エラスムスは許されて1495年9月頃にはパリのモンテーギュ学寮に入った。

エラスムスは神学の学位を取るとの名目でパリ行きを許されたはずであるが、当地の神学にはとてもなじめなかったようだ。それよりもやはりヒューマニストたちとの交流を深めていった。以下に引用するのは、エラスムスが司教ヘンドリックに宛てて、ステインの同僚で幼いころからの友であるウィレム・ヘルマンスの『詩集』*Sylva odarum*の出版に支援を乞うために書かれた書簡の一部である。エラスムスはモンテーギュ学寮で病を得て、1496年の夏、静養のため一時ステインにもどるが、そのときにウィレムの詩を預かり、パリにもどってからその出版のために奔走した。その詩集の末尾にこの書簡は掲載される。

2）Kristeller, Paul Oskar, 'Moral Philosophy,' in *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, eds., C. B. Schmitt and Quentin Skinner (Cambridge University Press 1988) pp. 319-25.

反対に、恵まれた才能を与えられている人たちは、ほとんどの場合、なぜだか分りませんが、あるいは名誉の虚飾を求め、あるいはひどく高慢となって放縦のためにより悪くなり、さらにはキリスト教の敬虔や純真さを忌み嫌います。というわけで、私は、最近の詩人たちでキリスト教徒である者までもが、自分たちの模範として、聖アンブロシウスやノラのパウリヌス、プルーデンティウスやイウウェンクス、モーセやダヴィデやソロモンよりも、カトゥッルスやティブルス、プロペルティウスやオウィディウスを重んじていることを腹立たしく思っています。まるで自らすすんでキリスト教徒になったわけではないとでもいうように。

しかし、私自身も、人が私を非難しているように、かつて愛した人たちについては深入りしすぎないように自分を抑えようと思います。私としては、宗教的な題材も、きれいな文体であれば、その土地の財宝[3)] によって輝きを放つことができると考えているガガンと共にいることをうれしく思っています。私はエジプトの家財が用いられることを否定しません。しかしながらエジプト全体が持ち込まれることは良しとしません。私見では、このことにおいては、かのバプティスタ・マントゥアーヌスが見事な仕事を成し遂げています。彼はウェルギリウスと故郷を同じくする運命にあって、学識においても十分彼に近づきました。アグリコラがフィルミアヌス・ラクタンティウスをキリスト教のキケロと呼んでいたのとまったく同じように、まさにキリスト教のウェルギリウスと呼ばれるべきであると私には思

3）本文vernaculis opibus「その土地の財宝によって」。これはエジプトの家財を指す。英訳ではin vernacular works（*Collected Works of Erasmus*, vol. 1, Univ. of Toronto Press, 1974, p. 103. 以下CWE 1, p. 103のように略記する）となっているがそうであれば本文はvernaculis operibusとなるはず。エラスムスのこの方面での積極性は知られていない。Vredeveldも同様の指摘（CWE 86, p. 401, n. 67）. Vredeveldは根拠として『反蛮族論』などでの表現をあげている。Aegyptias opes（*Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami* Ⅰ-1, North-Holland Publishing Company, 1969, p. 117, ll. 5-6. 以下ASD Ⅰ-1, p. 117, ll. 5-6. のように略記する）, ethonicis opibus (ASD Ⅰ-1, p. 129, l. 18).

われます。予感が私を裏切らなければ、いつかバプティスタも幾年かの歳月が妬みを取り除けば、栄光と名声において同胞にそれほど劣らぬようになることでしょう。かのカルメル修道会にとっても、彼を抱いたことはきわめて幸運なことで、彼のおかげで何に対しても立ち向かっていくことができましょう。ここでこのすでに歳を重ねた人物に若きウィレムを並べようなどとは思いませんが、彼の習作もいつの日かステインの田舎に、すでにその幸運に二度も浴したマントヴァも侮ることができないほどのものをもたらすのではと大いに希望を膨らませています[4)]。

（Ep. 49ヘンドリック・ヴァン・ベルヘン宛書簡　1496年11月7日　パリ）

パリのヒューマニズムの代表的人物とされるロベール・ガガン（c.1423-1501）やイタリア出身の詩人ファウスト・アンドレリーニ（c.1462-1518）らとの交流はエラスムスがパリに来た当初から始まっていた。ガガンは聖三位一体修道会士で、1480年にパリで教会法の学位を受けている。そして教会法の学部長を何度か務めながら、イスラム教徒に戦争などで捕らえられたキリスト教徒を買い戻す聖三位一体修道会の活動のためヨーロッパ各地を訪れている。またパリで最初の印刷業者ギヨーム・フィシェ Guillaume Fichet を支援し、エラスムスの著作も出版するジョス・バード Josse Bade（c. 1461-1535）もパリに誘致し、自らもカエサルやリウィウスのフランス語訳を出すなど、パリの初期のヒューマニズムの指導的役割を果たした。1497年に出た主著『フランスの起源と歴史概要』*Compendium de origine et gestis Francorum* は1586年までに19回版を重ね、1514年までに七つの翻訳が出ている[5)]。

上の引用には、ヒューマニストとしてのエラスムスの態度がよくあらわれて

4）Erasmus, *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed. P. S. Allen, H. M. Allen and H. W. Garrod (Oxford: Clarendon Press, 1906-1956; reissued 1992) vol. 1, p. 163, ll. 83-108. 以下 Allen Ⅰ, p. 163, ll. 83-108. のように略記する。

5）Reulos, Michel, and Bietenholz, P. G., 'Robert GAGUIN', *Contemporaries of Erasmus* vol. 2, edited by P. G. Bietenholz (Univ. of Toronto Press 1986). 以下 *Contemporaries* vol. 2 のように略記する。

いると思われる。エラスムスは最近の詩人たちが古代ローマの詩人たちばかりを模範として、キリスト教徒で詩文をものした人たちよりも重視していることへの不満を述べ、かつて自分も異教の詩人たちを愛していたが自制すると言っている。ここで言及されている「エジプトの家財」とは、イスラエルの民がエジプトを出るとき、金銀や装身具を奪ったという旧約の「出エジプト記」（3：21-23）の記述を根拠に、異教の学問をキリスト教信仰に役立てることを表すもので、アウグスティヌスが『キリスト教の教え』（2. 40. 60）で説いているのが最も有名である[6)]。エラスムスはここで異教の文学をキリスト教信仰を「輝かせる」splendescereために用いることができると述べ、そうした考えをガガンと共有していることを嬉しいとしている。つまりキリスト教信仰から離れて古代の異教詩人たちに耽溺することはしない、つまりそれが「エジプト全体を持ち込むことを良しとしない」ことの意味であろう。けれども「深入りしすぎないように自分を抑えよう」という言い回しが、エラスムス自身が古代の異教文学を深く愛していることをよく示していると思われる。このような言い方についてルンメルRummelは、神学を学ぶ目的でパリ行きを許可したヘンドリックに対して信仰を重んじる態度を示さなければならないエラスムスの立場に注意を向け、古代文学を控えるというのは偽善的とも受けとれるような記述だとしている[7)]。しかしこのヘンドリック宛ての書簡は全体として古代文学への言及も多く、しかもウィレム・ヘルマンスの詩集出版への支援を願う書簡であるとすればヘンドリックは学芸にかなり理解のあった人物だったと思われる。これと対照的なのはステイン修道院長のニコラウス・ウェルネルス宛ての書簡で、そこではエラスムスは他のことにかまけず神学に専念している姿を報告している[8)]。つまりここでのキリスト教信仰と異教文学についての記述は、自分の異教文学への傾倒ぶりを隠すものというより、ヒューマニストのあるべき姿についてのエラスム

6）加藤武 訳『キリスト教の教え』（教文館 1998年）p. 141.

7）Rummel, Erika, *Erasmus' Annotations on the New Testament* (Univ. of Toronto Press, 1986) p. 8.

8）Allen Ⅰ, pp. 158-9, pp. 201-2, Epp. 48, 74.

スの考え方をより誠実に示したものと言えるのではないだろうか。この書簡がヘルマンスの詩集に付されて出版されたことを考慮すれば、パリの詩人たちに対するエラスムスの立場の表明とも言えるからである。ヘルマンスの詩集が出版されたのは1497年の１月20日である。

エラスムスが先の引用なかで、キリスト教信仰に「エジプトの家財」を用いた同時代の模範として挙げているバプティスタ・マントゥアーヌスBaptista Mantuanus（1447-1516）は、その名の通りマントヴァ生まれの詩人で、彼の詩はキリスト教の題材と古典的な形式を結びつけたことで高い評価を得ていた。マントヴァでグレゴリウス・ティフェルナスGregorius Tiphernas（c. 1413-c. 1464）、ジョルジオ・メルーラGiorgio Merula（1430-1494）らと学んだあと、パドヴァとボローニャの大学で学んでいる。16歳からカルメル修道会に入り、その活動にも積極的だった。エラスムスの友人たちの間でも高く評価されていて、ベアートゥス・レナーヌスBeatus Rhenanus（1485-1547）は彼の詩集を編集し、ジョス・バードは彼の全集を1513年に出している。またジョン・コレットJohn Colet（1467-1519）は彼の聖パウロ学校の生徒たちにマントゥアーヌスの宗教詩を学ぶように求めている[9)]。

２．コレットと異教文学

エラスムスはパリにもどってもモンテーギュ学寮には入らず、家庭教師などをして下宿生活を始めていた。そうして教えていた学生たちのために作った教材は、『書簡文入門』*De conscribendis epistolis*（1521年出版）、『学習計画』*De Ratione Studii*（1512年）、『文章用語論』*De duplici Copia verborum ac rerum commentarii*（1512年）、『対話集』*Familiarium Colloquiorum Formulae*（1518年）といったのちのベストセラーのもとになる。

1499年の６月頃、エラスムスは家庭教師として教えていたマウントジョイ卿の招待でイングランドへ渡った。マウントジョイ卿はエラスムスをその上流階

9）D’amico, John F., ‘Baptista MANTUANUS’, *Contemporaries* vol. 2.

級の人間たちに紹介した。まだ少年だったヘンリー八世にも会っている。しかし、最も重要なのは、ジョン・コレットやトマス・モアたちとの生涯続く交友が始まったことであろう。のちのイングランド訪問でエラスムスは『痴愚神礼讃』をモアの屋敷で書き上げることになる（1509年）。エラスムスは、ジョン・コレットがオクスフォードで行っていた聖書講義に深い感銘を受けたようである[10)]。コレットの人格はエラスムスに非常につよい影響を与えたとされているが、異教文学についてはどのように考えていたのか。コレットによるパウロの書簡「コリントの信徒への手紙一」第十章への解説には次のようにある。

> ゆえにキリストとのみ、聖書の見事な食卓において宴を共にするべきである。新約聖書においてたっぷりと食事をするべきである。そこにおいてキリスト自身によってモーセの水がワインへと変えられたのだから。そのほかの食卓や本、つまり異教のものにおいては、キリストの香りがするものはなく、悪霊の匂いのしないものはない。主の宴の客ではなく悪霊の仲間であると思われたいのでなければ、キリスト教徒はけっしてそれらの食卓につくべきではない。牧畜と同じように、その土地のいかんによってその成果も決まってしまう。主のものではなく悪霊のものである異教徒たちの知恵を食べようと欲するなら、われわれは主の原則を放棄することになる。そのような食卓で、すなわちそのような本から誰も食べ物をとらない。聖書に疑いを持ったり、聖書を顧みないのでない限り。これらはどちらも邪悪で不敬虔なことであり、そして神を試すという忌むべきことなのであるから。[11)]

これは「コリントの信徒への手紙一」（10：21）「主の杯と悪霊の杯の両方を飲

10）Allen Ⅰ, p. 247, ll. 55-58.

11）*Ioannis Coleti Enarratio in Primam Epistolam S. Pauli ad Corinthios,* ed., J. H. Lupton (London1874) p. 238, cf. *John Colet's Commentary on First Corinthians*, ed., and trans. B. O' Kelly and C. A. L. Jarrot (Binghamton 1985) pp. 216-19.

むことはできないし、主の食卓と悪霊の食卓の両方につくことはできません」[12]を踏まえて述べられたものであり、1496年から1505年の間に書かれたと考えられている[13]。コレットはオクスフォードで講義を始める以前にイタリアなどに留学しているが、彼の関心は宗教に集中しており、文学への関心は薄かった[14]。コレットはのちに聖パウロ学校を設立しているが、そこで彼は古典語教育を重視したけれども、教材はキリスト教作家のものを中心とし、異教徒のものは一部をのぞいて不浄な文学として排除しようとした[15]。

コレットはエラスムスにオクスフォードに残って自分と同じように聖書の講義をするように勧めたが、エラスムスはこれを断っている。コレットはその理由を異教文学の研究のためではないかとみていたようだ。コレット宛の書簡には次のような個所が見られる。

> 詩学あるいは修辞学を教えようとして、この地に上陸したのではありません。これらは、私にとっては、必要でなくなったら魅力あるものでもなくなります。これを拒むのはわたしの目的に及ばないからであり、それを断るのは力量を上回るからです。愛するコレットよ、一方であなたは無実の者を非難しています。というのは、世俗的と呼ばれる文学の職を望ましいと思ったことはありませんので。もう一方であなたの勧めはむなしいものとなります。というのは、それについては私はあまりに力不足であると自覚しているからです。[16]
>
> (Ep. 108 ジョン・コレット宛書簡　1499年10月　オクスフォード)

---

12)『聖書』新共同訳（日本聖書協会 1991年）p.(新)312.

13) edd., and trans. B. O'Kelly and C. A. L. Jarrot *John Colet's Commentary on First Corinthians*, (Binghamton 1985) p. 19.

14) Gleason, John B., *John Colet* (Univ. of California Press 1989) pp. 63-64.

15) 大川なつか「ジョン・コレットのキリスト教的人文主義に関する一考察――ルネサンス教育研究のための基礎的作業――」早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊15号1（2007年）pp. 71-81.

16) Allen Ⅰ, p. 248, ll. 95-101.

以上のようなことを見るとコレットのエラスムスに対する影響を過大に考えることには注意が必要であると思われる。とくにエラスムスが、「キリスト教と古代哲学との統合」という「生涯追求すべき課題」をコレットから学んだというような見方[17]は、いささか大げさのように思われる。前節でも見た通り、そのような問題意識はイングランドに訪れる以前からすでにエラスムスの中にあったと考えられるからである。

3.『格言集』初版（1500年）「序文」

イングランドからパリへ戻ってから半年ほどたった1500年7月の初め、エラスムスは『格言集』初版*Adagiorum Collectanea*を上梓する。その中にはギリシアとローマの古典を研究しながら収集した818の格言・名句が収められていた。それらはウェルギリウス、テレンティウス、キケロ、プリニウス、クインティリアヌス、ヒエロニムス、アウグスティヌスなどからのものであり、ギリシア語の格言もプラトンやプルタルコスからのものを中心に154含まれていた。内容とともにローマン体活字で印字されていることが異教の古典を扱っていることを示すこの本は、エラスムスのヒューマニストとしての初の業績となった。

コレットには異教文学への傾倒を快く思われなかったようだが、やはりエラスムスはイングランドでこの『格言集』作成への力を得たようである。序文として付されたマウントジョイ卿に宛てた手紙の中で次のように述べている。「私がこの仕事を始めたのは、ひとつには、あなたの望みが勧めたからであり、ま

17）金子晴勇『宗教改革の精神――ルターとエラスムスの思想対決』（講談社学術文庫 2001年）p. 89. さらに金子晴勇『エラスムスの人間学――キリスト教人文主義の巨匠』（知泉書館 2011年）の中の「ヒューマニストから聖書人文学への転身」と題する項でも「コレットとの出会いがエラスムスに決定的方向転換を強いる」（p.72）と述べられている。両者の聖書研究の方法は非常に違ったが、コレットの「人となり」の魅力がそうさせたとも説明されている。このような見方の源にはSeebohm, Frederic, *The Oxford Reformers* (London, 1867) とLupton, Joseph. H., *A Life of John Colet,* D. D. (London, 1887) があると考えられる。これについてはGleason, John B., *John Colet* (Univ. of California Press, 1989) pp. 3-14を参照。

たリチャード・チャーノック師の話が私を駆り立てたからです」[18]。リチャード・チャーノックRichard Charnock（d.1505）はエラスムスと同じくアウグスチノ修道祭式者会に属していて、セントメアリー・カレッジの首長であった。エラスムスはオクスフォードでは彼のところに滞在していた。エラスムスと彼の間でどのような会話がなされたのかは具体的には分からないが、マウントジョイ卿とチャーノックの二人が『格言集』の執筆に大いに賛成していたことは確かだろう。では『格言集』の執筆編纂の最初の意図はどのようなものであったのか。またエラスムスは格言をどのようなものと考えていたのか。序文の内容を見ていこう。

文体の卓越した豊かさも楽しみも、警句、暗喩、比較、模範、例、直喩、形象といった表現方法にかかっていることを誰が知らないというのでしょうか。それらが人々の会話の中で一致して共有されるように受け入れられていれば、信じられないほどの華麗さと魅力をもたらして、文章を常に力強く美しくしてくれます。誰しも知っていることは進んで聞いてくれますから。さらにいわゆる古代のものであることが勧められます。なぜなら格言もワインとまったく同じように年代によって値打ちが上がるからです。

またそれらは洗練させるためだけのものではありません。力を与えることにも役に立つのです。そのためにクインティリアヌスは[19]、これらを審判者を楽しませるためのもののうちに、また文彩のうちに数えるだけでなく、説得しようとするときにも、ことわざの機知によって論敵にやり返すときにも、自分自身を弁護するときにも、最も効力がある根拠の中に含まれると考えています。[20]

（Ep. 126 マウントジョイ卿宛て書簡　パリ　1500年6月）

18）Allen Ⅰ, p. 290, ll. 19-21.
19）『弁論家の教育』5. 11. 37, 41.
20）Allen Ⅰ, p. 291, ll. 44-57.

（74）

先に引用したマウントジョイ卿へのあいさつの後、まずエラスムスは、文章を飾り文体を引きたたせることと、弁論のための効果的な論拠を与えてくれることの二つを挙げ、ことわざの修辞的有用性について論じている。ことわざはそのような表現方法であり、多くの人に受け入れられていることと、古いものであることに価値が置かれている。

つづいて、エラスムスはことわざを用いてきた人たちの名を挙げていく。古代の作家たちからはプラトン、プラウトゥス、テレンティウス、キケロなど、そしてキリスト教教父の中からヒエロニムスとバシレイオス、そしてイタリアのヒューマニストからエルモラオ・バルバロ、ピコ・デラ・ミランドラ、アンジェロ・ポリツィアーノの名を挙げている。そして格言の用い方も様々で、ことわざを重んじる人もそうでない人もあるが、それぞれ文体の特徴によってことわざに払う注意の大きさが異なるので、これをさげすむようなことがないようにと訴えている。

つぎにエラスムスは、修辞的な価値を否定し、ことわざを不要であると説く敵を想定して、そのような人には次のように述べればよいとしてことわざの擁護論を展開する。

「もしあなたが修辞家と呼ばれることを恥ずかしく思っているなら、それはあなたが賢明でありたい、神学者でありたい、あるいはそう見られたいと望んでいることでもある。さしあたり話し方にこだわることは全く的外れなことだとしておこう。分別がある人はそんな風に考えたりはしないけれども。しかし、このことわざの類の言い回しは、弁論家のものではなく、つねに智者、預言者、神学者たちに真に固有の独特のものだったのだ。かの古代の賢人たちも、多くのものの中から探求している。それに比べて我々は知恵においてなんと彼らに後れを取っていることか、おしゃべりばかりは彼らを凌いでいるというのに。疑いなくその知恵の始祖たちは、詭弁のおしゃべりよりも、わざと暗喩や謎かけその他の表現方法を用いていくらかの不明瞭さを加味することで、畏敬すべき哲学の神秘を極めて短い格言

の中に閉じ込めることのほうを喜んだ。[21)]

（Ep. 126 マウントジョイ卿宛て書簡　パリ　1500年6月）

このようにことわざには古代の賢人の知恵が凝縮していると述べており、修辞と知恵の結びつき、あるいは哲学的な神秘をそのように表現すること自体を知恵といっているようにも受け取れる。さらにエラスムスは古代ギリシアでは神託から生まれたことわざが人々の間に広まっていたこと、旧約の預言者たちも多く用いていたこと、そしてパウロの書簡や福音書など新約聖書にもことわざが見られることから次のように述べている。

…このような類の言葉は、見せかけだけではなく、神聖な何かを含んでいて、神の事柄にもふさわしいとは思わないか。だから多くの理由から、学識ある人たちや神聖な人たちがこのような言い方を探求したのは理由がないわけではないことを熱心な若い人たちに教えようと、あるいはとにかく訴えかけようと私によって企てられたことは無益でも不毛でもないと思われたのだ。」[22)]

（Ep. 126 マウントジョイ卿宛て書簡　パリ　1500年6月）

ここでエラスムスはことわざが宗教的な事柄と無縁ではないと述べている。そしてことわざに秘められた知恵というものが異教の世界とキリスト教の世界の境界を越えて用いられていることを示唆し、ことわざが異教のものに由来する事からくる非難から擁護している。

つぎにエラスムスは、ことわざとはどのようなものか、その定義を試みている。

…警句は必ずことわざであるとは考えませんし、また反対に、ことわざも直ちに警句であるとは思いません。例えば「嫉妬は火のように高みを求

21）Allen Ⅰ, p. 294, ll.154-166.

22）Allen Ⅰ p. 295, ll. 191-197.

める」は警句だけれども、ことわざではありません。反対に「港の中を航海する」[23] はことわざですが、警句ではありません。しかし、「ワインの中の真理」[24] は警句でもあり、ことわざでもあります。ですから、このことわざであるためには二つのことが必要とされるように思われます。一つは、なんらかの仕方で結びが特徴づけられていることです。たとえば「突き棒を蹴り返す」[25] など転義していること、これが最も大きな群れをなしています。あるいは「コリントスのディオニュシウス」[26] や「われわれトロイア人は終わった[27]」のように寓意的であるもの、あるいは「半分は全体より多い」[28] のように謎かけになっているもの、あるいは他のさまざまな文飾、単純なものであれば、「自分のものは美しい」のように心地よく適切に簡潔であることなどです。そしてもう一つはあらゆる人たちの会話の中にすでによく広まっているということです。[29]

（Ep. 126 マウントジョイ卿宛て書簡　パリ　1500年6月）

『格言集』と題名には格言adagiumという言葉が用いられているが、エラスムスは彼が集めたものについて、ここでは日本語「ことわざ」を当てているparoemiaあるいはproverbiumという語を用いている。フィリップスPhillipsによれば、エラスムスのいうparoemia「ことわざ」はヨハネによる福音書（16：29）

23）安全な状態にあること。ASD Ⅱ-1, Elsevier Science Publishers b. v. , 1993, p. 164, CWE 31, p. 97.

24）人が酔って本音を洩らすことから。ASD Ⅱ-2, pp. 140-42, CWE 32, pp. 75-77.

25）牛が農夫の振るう突き棒を蹴り返しても牛の境遇は変わらないことから、無駄な抵抗あるいは運命に逆らうことを意味する。ASD Ⅱ-1, pp. 359-60, CWE 31, pp. 275-76.

26）シラクサの僭主だったディオニシュウスが権力の座から追われた後、コリントスで雇われ教師となったという逸話から、極端な人生の転落を意味する。ASD Ⅱ-1, p. 192, CWE 31, pp. 125-26.

27）命運が尽きること。ASD Ⅱ-2, pp. 370-72, CWE 32, p. 209.

28）中庸の勧め。「全体」は強欲を、「半分」は公平を意味するとも。ASD Ⅱ-2, pp. 402-407, CWE 32, pp. 228-31.

29）Allen Ⅰ, p. 295, ll. 205-216.

の中で弟子たちがイエスに Ἴδε νῦν ἐν παρρησίᾳ λαλεῖς καὶ παροιμίαν οὐδεμίαν λέγεις.[30)]「今は率直に話してくださいます。ひとつもことわざをおっしゃいません」というときに用いられている παροιμία で、神秘的なものあるいはなぞを含んだ性格をもつものであるという[31)]。上に見たようにエラスムスは、二つの条件を挙げている。一つは、ことわざは単なる警句 sententia とは違って修辞的工夫が凝らしてあって、文字通りの意味とは異なる意味で使われたり、背後に物語などがあって寓意的なもの、謎かけになっているもの、そして簡潔さなどが求められている。もう一つには、多くの人の間に広まっていることを挙げているが、これに並んで、劇場から theatro とられたもの、あるいは智者の言から sapientis、また詩人から e poeta、寓話から ex apologo、偶然の会話から ex sermone cuiuspiam forte、新奇な出来事から ex euentu nouo et insigni、人や民族の習慣から ex hominis gentisque moribus とその由来に何かしら有意義な根拠をもつものを求めている。ここで挙げられた二つの条件は、先の引用に見られた二つの修辞的有用性、文体を引き立たせることと効果的な論拠を与えてくれることを敷衍して述べたものともいえるだろう。

以上が1500年に出版された『格言集』の序文に見られるエラスムスのことわざについての主な記述であるが、とくに注目すべきは修辞的な意義が強調されていることと、またそのことが宗教的な意義と深く結びついていることも訴えている点である。異教世界に伝わることわざに込められた知恵というものが、キリスト教の世界にあって同じように意義あるものとして通用するとエラスムスは強調しているように思われる。

4．『格言集』第３版（1508年）「序論」第５節

エラスムスはイングランドを初めて訪れた後、ギリシア語の学習に没頭するようになる。しかしそれは、新約聖書の研究のためだけとは言い切れないであ

30）*Greek New Testament* 3rd corrected edition (the United Bible Society 1983) p. 397.

31） Phillips, M. M., *The Adages of Erasmus* (Cambridge, 1964) p. 5.　ただし新共同訳では「たとえ」と訳されている。『聖書』新共同訳（日本聖書協会 1991年）p.(新)201.

ろう。エラスムスはこの時期も異教の文学を研究し続けている。1501年にはキケロの『義務について』を註解を付して出版しているし、1503年にはリバニオスの演説を三編翻訳している。また1505年から1506年ふたたびイングランドに滞在している間に、エウリピデスの『ヘクバ』と『アウリスのイーピゲネイア』を翻訳し、トマス・モアとルキアノスの対話編をいくつか共訳している。

エラスムスは1506年からイタリアを訪れ、ヴェネツィアの出版業者アルドゥス・マヌティウス（1450-1515）と一緒に『格言集』の大改訂を行うことになるが、その仕事を始める前にアルドゥスに送った書簡の中で次のように書いている。

> おそらくあなたはいくつかの点で私と意見を異にするでしょう。このため、わたしは是非あなたにお会いしたいと願ってきました。私もいくつかの個所に自信がありませんし、本の中にも誤りを免れていないところが少しあると思っています。たとえば『ヘカベー』のB. 4 .右側οὐ μήν γε πείθη とありますが、οὐκ ἥν γε であると私は思います。最後のοὗτος σὺ μαίνη は正確にはヘカベーではなくアガメムノーンに帰すものと私は考えます。『アウリスのイーピゲネイア』のZ. 6.左側ταχθεῖσα τοῖσι φιλτάτοις, とありますが、私の読みはτἄχθιστα です。同様に、今は思い出せませんが他のいくつかの個所についても、本にあるのと私のは異なると敢えて思います。これらのことについて、健康に配慮せざるをえない場合を除いて、直接意見を交換したいと強く希望します。というのもあなたの判断を大いに信頼しているからです。[32]
>
> （Ep. 209 アルドゥス・マヌティウス宛書簡　ボローニャ　1507年11月）

ここでエラスムスが本exemplarと呼んでいるのは1503年にアルドゥスが出版したエウリピデスの作品集で、マルクス・ムスルスMarcus Musurus（c1470-

32）Allen Ⅰ, pp. 440-41, ll. 8-17.

1517）[33] の校訂による初の活字本editio princepsであった。エラスムスはこれに対して、自分の読みを提示しているが、これらの読みは現代の古典学者が採用しているものと同じである。アムステルダム版全集の校訂者のJ. H. Waszinkによれば、このような個所が25箇所はあるとエラスムスのラテン語訳から推測されうるという[34]。このことはエラスムスのギリシア語の力がイタリアを訪れる以前に相当のレヴェルに達していることを示している。このことから、エラスムスの文献批判やギリシア語の力はイタリア訪問の成果ということは難しいと言われている[35]。

しかしエラスムスは、ヴェネツィアで協力を惜しまない仲間と多くのギリシア語資料に恵まれた[36]。エラスムスは、1508年1月にはアルドゥス・マヌティウスのもとに滞在していた。アルドゥスは当時最も有名な印刷業者で、厳密な校訂と優れたギリシア語の活字で知られていた。またアルドゥス自身もローマ大学・フェッラーラ大学に学んだヒューマニストであり、また彼のもとには亡命ギリシア人のヨアンネス・ラスカリス（1445-1535）などのヒューマニストがいて、エラスムスは彼らの協力を得ながらアルドゥスの所蔵する豊富な文献を用いて『格言集』の増補改訂を行うことができた。1506年末にパリのジョス・バード書店から出された第2版で新たに加えられた格言はわずかに20ほどであったが、第3版では格言総数は3260にもなり、名称も*Adagiorum collectanea*から*Adagiorum chiliades*と改めた（単に「格言集」との呼称から「何千もの格言」の意に）。そしてエラスムスが格言・ことわざについて論じた長文の序やアルファベット順とテーマ別の二つの便利な索引が備えられた。またギリシア語の格言も圧倒的に増え、それにはエラスムスによる訳が付されている。それぞれの格言につ

33）クレタ島出身のギリシア人。1503年にパドゥアで、1512年にはヴェネツィアでギリシア語の教授となる。

34）ASD Ⅰ-1, pp. 197-212.

35）Heesakers, Chris L., “Erasmian Reactions to Italian Humanism”, *Erasmus of Rotterdam Society Yearbook 23*, 2003, p. 46.

36）ASD Ⅱ-3, pp. 22-24. 拙訳「エラスムス『格言集』から「ゆっくり急げ」翻訳と解題」『創価大学人文論集』第22号（2010年）pp.(232)-(235).

いてもより詳しくその由来や様々な作家の使い方の違いを解説し、ときには格言の解説をこえて当時の学問への批評などを展開している。この『格言集』第３版は大成功をおさめ、エラスムスはヨーロッパ中にその名を知られることになる。この『格言集』の改訂作業がどのようなものであったか、エラスムス自身が『格言集』そのものの中で詳しく述べている[37)]。

エラスムスは『格言集』第３版*Adagiorum chiliades*にそれまでの版にはなかった序論PROLEGOMENAを書いている。この序論は14の節に分かれていてそれぞれに標題が付いている[38)]。これらの標題を見ると、初版の序文でみられた修辞的有用性の主張をさらに詳しく展開したものであることがわかる。ここでは本稿の主題と関連の深い第５節（v.）の一部に注目したい。

エラスムスはこの序論第５節で、初版の序文と同様に古代の哲学者や作家たちの名を挙げ、彼らがことわざを愛用していたことを理由にことわざを蔑まないようにと訴える。そして次のように述べる。

37）ASD Ⅱ-5, pp. 27-34. 拙訳「エラスムス『格言集』から「ヘラクレスの難業」翻訳と解題」『創価大学人文論集』第20号（2008年）pp.(171)-(179).

38）ASD Ⅱ-1 , pp. 45-83. i. QVID SIT PAROEMIAことわざとは何であるか。ii. QVID PAROEMIAE PROPRIVM ET QVATENVSことわざの特徴と限界。 iii. QVIBVS EX REBVS ACCEDIT NOVITAS PAROEMIAEことわざの意外性はどこから来るか。iv. QVOMODO PAROEMIA DIFFERAT AB IIS, QVAE VIDENTVR ILLI CONFINIAことわざはそれらと似たものとどう違うか。v. COMMENDATIO PROVERBIORVM A DIGNITATEことわざの価値による推奨。vi. AD QVOT RES VTILIS PAROEMIARVM COGNITIOことわざの知識の様々な用法。 vii. AD PERSVADENDVM CONDVCERE PROVERBIAことわざは説得に役立つ。viii. AD ORNATVM CONDVCERE PAROEMIAMことわざは文体を飾るのに役立つ。ix. AD INTELLIGENDOS AVTORES CONDVCERE PAROEMIAMことわざは作家たちを理解する上で役立つ。x.COMMENDATIO A DIFFICVLTATE難しいゆえに推奨。xi. QVATENVS VTENDVM ADAGIIS　格言の用法の範囲。xii. VARIVS PROVERBIORVM VSVSことわざの様々な用法 xiii. DE FIGVRIS PROVERBIALIBVSことわざによる譬喩について。xiv. DE PRAEMOLLIENDA PAROEMIAことわざを和らげることについて。第13節（xiii.）ではさらに９項目にわたって詳しく論じている。

そして、聖なる預言者たちの託宣が、ある種のことわざによって成り立っているのを見るとき、だれがこの類を蔑むだろうか。そのようなもののうちに「先祖が酸いぶどうを食べれば子孫の歯が浮く」[39] がある。あらゆる点でわれわれが倣うべきキリスト自身がとりわけこのような話し方を喜んだことを思うとき、神秘的なものにふさわしい何か聖なるものとして、だれが崇敬しないだろうか。ギリシア人の間には「果実から木を判断する」との格言が伝わっている。そしてルカによる福音書（6：43）には、同じような「悪い実をつける良い樹はないし、良い実をつける悪い樹はない」と読むことができる。またギリシア人の間では、ピッタコス[40] が助言を求めてきた者を独楽で遊んでいる子供たちのところへ行かせると、その男は妻をめとることに関して教えられるようなことわざ「自身と対等の者に向かえ」を彼らから聞いたと言われている。キリストも広場で遊ぶ子供たちからことわざを引き出している。「あなたのために笛を吹いたのにあなたは踊らなかった。あなたのために悲しく歌ったのにあなたは泣かなかった[41]」。もし聖なるものを俗なるものに比べてよければ、これによく似たものがテオグニス[42] の「ゼウスはわれわれ全てを喜ばすことはない。雨を降らせようと降らせまいと」がある。

しかしもし古代への畏敬が誰かを動かすとしたら、ことわざよりも古い教えはないと思われる。これらのいわば印章の中に、古代の哲学のほとんどすべてが含まれている。古代の智者たちの託宣はことわざでなければ何であろうか。それらはかつて、人間から生み出されたのではなく、天に由来すると考えられていたほど敬われていた。ある諷刺詩人は言っている「『汝自身を知れ』は天より降りてきた」と。[43]

39）エレミヤ書（31：29）エゼキエル書（18：2）『聖書』（日本聖書協会 1991）pp. 1236, 1321.

40）七賢人の一人。ミュティレネMytileneのピッタコス 前7世紀から前6世紀。

41）ルカによる福音書7：32.

42）前6世紀の詩人。

43）ASD Ⅱ-1, pp. 58-60, ll. 233-258.

ここに見られる重要な点は、一つはキリスト教、しかも聖書そのものに現れることわざと異教徒の間に伝わることわざを比べて同じように扱っていることと、もう一つはことわざは人間が作り出したものではなく、天に由来するものととらえていることであろう。エラスムスは当初『格言集』には聖書からことわざを集めるつもりはなかった。それは、『格言集』を異教の古典を扱う作品と考えていたからであり、また聖書にあるものは多くの人にとって接近しやいと思われたからだった[44)]。しかし1508年からは上に見たように、キリストが用いていることわざと異教徒に伝わることわざの共通性を強調するようになる。その背後には、ことわざというものを人間に由来するものというよりも、人間を越えた神聖なものに由来するとみる考えがあると思われる。

むすびにかえて

すでにエラスムスは『反蛮族論』を1495年春に対話篇に書き直した段階で、アウグスティヌスを引用して異教の学問を擁護した後に「知恵」を重んじることを訴えている個所で次のように述べている。

> なぜ、かの『集会の書』の次の言葉を挙げないのか。「彼はいにしえのすべての人の知恵を詳しく調べ、預言の書の研究にいそしみ、高名な人々の話を心に留め、たとえ話の複雑な道へと分け入り、格言の隠れた意味を詳しく調べ、たとえ話のなぞをじっくり考える。彼は身分の高い人々に仕え、為政者たちの前にも出入りする。見知らぬ人々の国を旅し、人間の持つ、善い面、悪い面を体験する[45)]。」著者が不明のために知恵と題されたこの本では、なんと多くの学識への賞讃がなされていることか。知恵は信じられないほどの美しさを持っているので、われわれの目によって見られるとき驚くべきほどのそれに対する愛を呼び起こす、とプラトンによって厳かに

44）Phillips, M. M., *The Adages of Erasmus* (Cambridge, 1964) p. 27.

45)「シラ書」39：1-4『聖書 引照付』（日本聖書協会 2001）p.(続)254.

述べられているように[46]、この著者がだれであれ、雄弁に、知恵そのものの姿を描き出していると思われる。というのはわれわれをそれに対する愛へと駆り立てているからだ。

しかし誰かが、ここで讃えられているのは、世俗の知恵ではないというかもしれない。だが、もうひとつの、いわば天上の、そして神聖なる知恵、われわれの時代においては哲学の最も難しい部分であり、神聖なものも人間のものもあらゆる知識を結んだ知恵が讃えられているのである。[47]

エラスムスにとって、知恵とは、宗教的なものと世俗的なものを結ぶcopulareものであり、かつ美しいものであるという考えは、この時（1495年）から一貫していると思われる[48]。1499年のコレットとの出会いから、聖書研究への姿勢についてはともかく、『格言集』の編纂についてはエラスムスが何か力を得たとは考えにくい。異教徒の知恵を求めることを「邪悪で不敬虔なこと」と主張していたコレットと最晩年まで『格言集』を編纂し続けるエラスムスとの相違がここにあると言えるだろう。

1500年の『格言集』初版に寄せた序文では、修辞的な価値を蔑む者に対して、ことわざとはかつて預言者や神学者が求めた知恵であり、神聖な何かを含み、神の事柄にふさわしいと主張する。その序文で依拠していたクインティリアヌスの『弁論家の教育』（5.11.41）には次のようにある。「一般に受け入れられてい

46）『パイドロス』250 D

47）ASD Ⅰ-1, p. 118, l. 24 − p. 119, l. 10.

48）イーデンは、1495年の『反蛮族論』でのエラスムスは、ヒエロニムスとアウグスティヌスに従って、異教の文化を掠奪するもの、いわゆる「エジプトの掠奪」との考え方を脱していないと述べている。Eden, Kathy, '"Between Friends All is Common": The Erasmian Adage and Tradition', *Journal of History of Ideas* 59, 1998, p. 406. 畑もアウグスティヌスとヒエロニムスの考え方を受け継いでいる点だけを取り上げ、エラスムスが聖書から展開している異教文化に対する包括的な態度への視点を欠いており、エラスムスがただ「三〜四世紀の教父たちの後に続いている」と論じている。畑宏枝「エラスムスにおける『反野蛮人論』とヒューマニズム」『基督教学研究17』京都大学基督教学会（1997年）p. 70.

る諺もまた、作者が不明であるというまさにそのことによって、いわばすべての人々のものとなります」[49]。このような匿名性もエラスムスにとって知恵の純粋さや神聖さを高めたのかもしれない。さらに1508年の第３版の序論では、「聖なるものを俗なるものに比べてよければ」と断りながらも、聖書でキリストが用いていることわざも異教徒の間に広まっていた神託も同様に扱っていた。エラスムスの古代の異教文化への肯定的な姿勢は、すぐれた文化はキリスト自身が用意したものであるとの考えに支えられており、これも1495年の『反蛮族論』にはっきり表明されている[50]。

エラスムスが、ことわざの修辞的な美しさを述べる中で、キリスト教信仰と古代の知恵を深く結びつけようとしている姿勢は、ルネサンスのヒューマニストの特質をよく表している。彼らの道徳哲学の理想は、キケロの『弁論家について』に表明されているような修辞と哲学の融合であり[51]、ヒューマニストにとって雄弁とは、単に文が美しいということではなく知恵と文体の調和からのみ生まれるものであり、その目的は人を徳と価値ある目標に向かわせることにあったからである[52]。それは、ただ知識を伝えるのではなく、人間の意志に働きかけ、人間形成に役立つとの理想であった[53]。

1515年版の『格言集』では、聖なるものと俗なるもの、キリスト教信仰と異教的なものとの関係について、さらにその考えを深めていったと思われる表現

49）森谷宇一・渡辺浩司訳『弁論家の教育』下（京都大学学術出版会 2009年）p. 292.

50）ASD-1, p. 83, ll. 14-19. 拙稿「若きエラスムスとヒエロニムス――『反蛮族論』における引用をめぐって――」『エクフラシス』第２号（早稲田大学ヨーロッパ中世ルネサンス研究所2012年）p. 109.

51） Kristeller, Paul Oskar, *Renaissance Thought and Its Source* (Columbia University Press 1979) p. 243. キケロ『弁論家について』第３巻 第53-61節および第140-143節。大西英文 訳『キケロ―選集７』（岩波書店1999年）pp. 358-63, 405-07.

52）Gray, Hanna H., “Renaissance Humanism: The Pursuit of Eloquence,” *Journal of the History of Ideas*, vol. 24, no. 4, 1964, p. 498.

53）近藤恒一『ペトラルカ研究』（創文社1984年）pp. 215-20, 229-262.

が格言「アルキビアデスのシレノス」の解説[54] に見られるが、これについてはまた稿を改めて論じなければならない。

54）ASD Ⅱ-5, pp. 159-190. 拙稿「エラスムスの聖職者批判（2）――「アルキビアデスのシレノス」から」『東洋哲学研究所紀要』第24号（2008年）pp. (137) - (161) .

On the Prefatory Letter to the *Adages* of Erasmus: A Cross Section of Renaissance Moral Thought

Masahiro Yaginuma

In September of 1500, Erasmus published *Adagiorum Collectanea* which was his first achievement as a humanist. In the preface he emphasizes that ancient proverbs have a great rhetorical effectiveness and many of them include sacred wisdom. This could be an expression of an ideal of the Renaissance humanists: a harmonious union between style and wisdom which, they believed, guide men toward virtue. Erasmus tried to vindicate the wisdom derived from pagan literature.

In the previous year 1499, Erasmus met first John Colet who is said to exercise a great influence on him. However, Colet denies the value of pagan literature in his commentary on Pauline epistles which was written around 1500. Colet attitude was far different from Erasmus's in the preface to the *Adages*. So, we should reconsider Colet's influence on Erasmus as limited, especially on the point of appreciation of pagan literature.